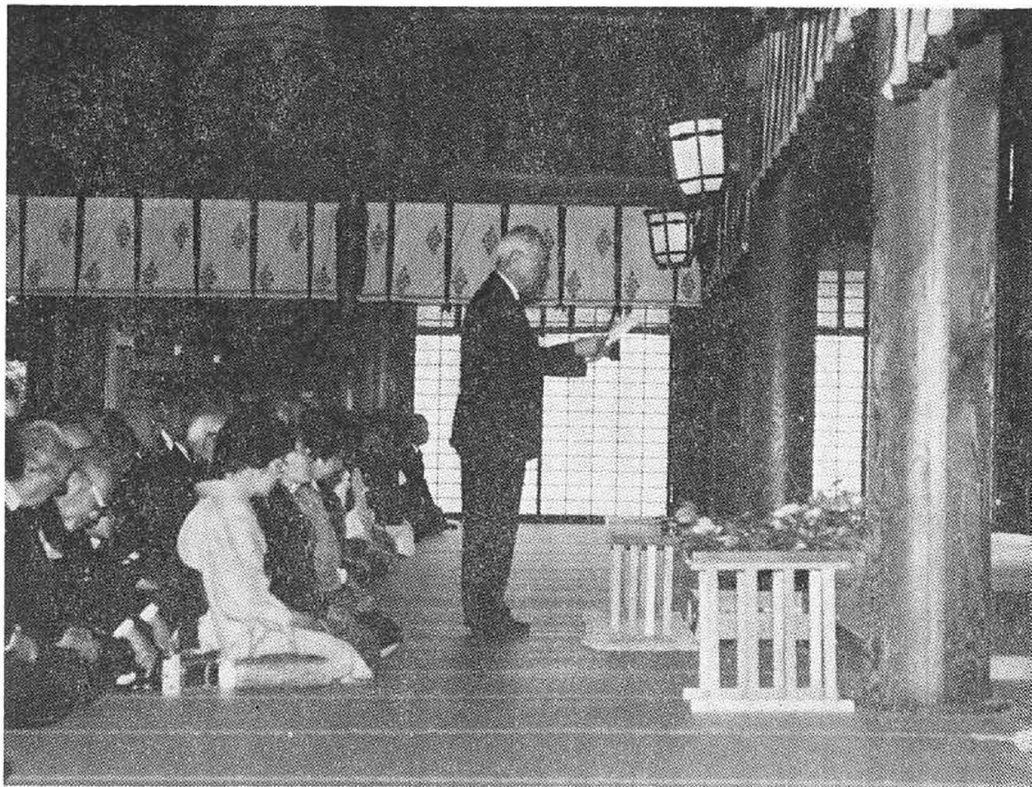




第9回特攻隊合同慰霊祭

最上 事務局長

特攻

第5号

〒102

東京都千代田区五番町12

勸借行社内

特攻隊慰霊顕彰会

特攻平和韻音奉賛会

電話 03 (263) 0851

編集人 最上 貞雄

発行人

昭和62年4月5日 桜花爛漫たる靖國神社に於て第9回特攻隊合同慰霊祭が厳肅の中に盛大に執り行われた。

慰霊祭に先だって、再興された遊就館に奉納した特別攻撃隊関係の諸史料、諸施設並びに同日より開催された特別攻撃隊写真展の清祓式、除幕式が執り行われた。

当日は全くの好天に恵まれ絶好の花見日和となり社頭は大変な人出で、慰霊祭にもご遺族を始め五〇〇名を越す多勢の方々のお参りをいただいた。

奉納された主なものは

一、遺書、遺影、遺品

二、特別攻撃隊の頌

三、特攻戦士の像

四、各種特攻出撃のレリーフ 四面

五、各種特攻兵器の模型

航空機 26機、舟艇 6隻

六、イリサン戦車特攻の立体模型

七、各種説明パネル

1、陸海軍航空特攻作戦図

2、陸海軍特攻兵力一覽表

3、陸海軍水上特攻隊配備図

4、水ぎわ特攻説明図

八、特攻関係書籍

除幕式は竹田会長を始め各代表者十二名によって六枚の幕が落された。何れも田畑一作先生の作製にかかわるものである。

二階の特別企画展示室には毎日新聞社等多数の方々の協力を得て二〇〇点に及ぶ特別攻撃隊の写真パネルが展示され、参視者は思はず目頭を熱くした。

参集所に於て竹田会長より神野藤権宮司に奉納品の目録と維持基金 金壹百万円の奉納

が行われ、神社側より特攻隊慰霊顕彰会に感謝状が贈られた。

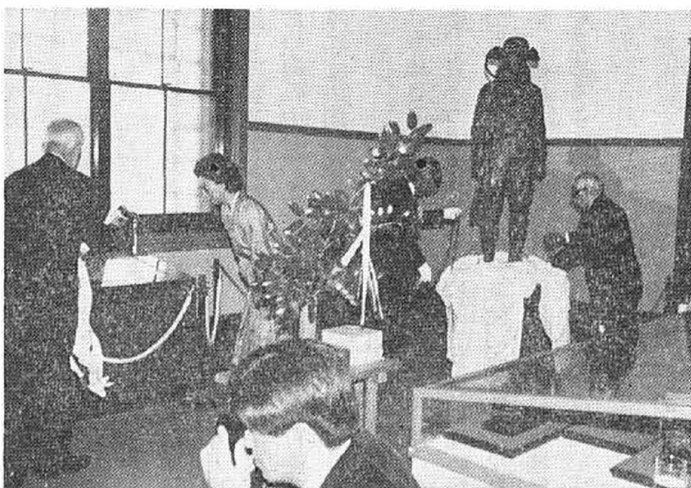
拝殿に進んで修祓、献饌、祝詞奏上があり続いて竹田会長より祭文が奏上された。

靖國神社に於ける慰霊祭を厳肅の中に終了し徒歩にて私学会館の直会会場に移動した。

竹田会長の挨拶に続いてご遺族を代表してはるばる九州よりご参列下さった陸士56期八紘隊で比島で戦死された津留 洋様の兄上敦様より力強い挨拶をいただいた。

アトラクションとして新進歌手田上 爽君より「雲染む果てに」と「さらば祖国よ妹よ」の特攻戦士を偲ぶ歌が熱演された。

終りに一同にて「同期の桜」「海ゆかば」を台唱、万歳三唱をして散解した。



特攻展示室除幕

知覧鎮魂の賦

井上 岩夫

新鮮な一撃食らう

知覧特攻平和会館の新館オープンの初日（昭和61年12月13日）友人Tの車で知覧まで連れて行ってもらった。

館内に足を踏み入れ、中央ロビーのジャンボな壁画に直面した途端に動けなくなってしまう。これは全くの不意うちというやつだった。「特攻」ということはから誘発されてきたこれまでの常識に新鮮な一撃を食らった思いだった。「知覧鎮魂」と題する陶板画であることは後で知ったが、これで鎮魂ということばでは届かなかった「救い」の願望が見事に映像化されたと思ったのだ。

六人の天女に囲繞され抱きかかえられた血まみれの男は天国に連れていかれようとしているのだった。白を基調とした画面にしっかりと溶けこんだ天女たちの衣のひだのやさしさはどうだろう。そのやさしさとは正反対に抱きかかえられた男のまがまがしい不気味さもこれまた何としたことだろう。火とスミレと爆煙と鮮血とでんだらに染めあげられたこんな人間を私はこれまでどんな画集でもお目にかかったことがない。右ひじに小さく見える日の丸は、彼が今蹴放した一式戦闘機^{一式戦闘機}の主翼にある赤い日の丸と同じものだ。この基地から飛びたって再び還らなかった一〇二六人の一人一人に我々は彼の中に見るべきなのだろうか。

（西日本新聞・八月二十八日より転載）

陶壁『知覧鎮魂』を拝し

荒木しげ子

編者註

「飛燕」を見て来て呉れましたかとご遺族にお尋ねしたら、貰い泣きする話が返ってまいりました。

ご遺族は第51振武隊 悠久隊々長
陸士57期生 荒木春雄君の未亡人
荒木しげ子さんであります。

お二人は昭和20年4月9日雨の降る日、突然慌ただしく家に帰って来た春雄君が「特攻に出ることになったゾ、しげ子と結婚するんだ!!」というので、許嫁同士の二人は急ぎ仮祝言を挙げた。

「雨の降る日には帰って来るヨ」との一言を言い置いて―そしてこの一言が、その日からのしげ子さんを、どんなに苦しめることになるかを知らないで―再び帰ることなく、一カ月後の5月10日知覧着、翌11日朝「隼」に搭乗した春雄君は沖繩に出撃、嘉手納飛行場西方海面にて戦死されました。

遺児に「悠久」と名付けたのですが、誕生後10カ月で病死、しげ子さんの将来を思っ春雄君が我が子を天国に連れて行っただけのようでした。

知覧から帰京されたしげ子さんは、昨5月6日夜、時折涙を浮かべ乍ら、静かに話して呉れました。

荒木しげ子

平和会館の正面から入った私は、吸い寄せられるように、大きな絵の前に立ちました。

この40数年の間に、眼に焼きついてしまった「隼」の姿に、私は思わず足を運んでいました。「知覧鎮魂の賦」を見つめている中に、涙が出て出てまわりに多くの人が行き交うのも忘れて、喰い入るように見つめ続けてしまいました。

私にとっては、一時間でも二時間でも、恥も体裁もすてて、「鎮魂の賦」を見続けていたかったし、何回も知覧に来て、初めて「これだ!!」という感動にうたれました。傷ついて頭をたれ、両手を力なくダラリとした隊員の身体を両腕で抱きかかえる天女の冠は下に落ちていました。一人の天女は足をしっかりとかがえていました。天女の吐く息が隊員の頬にかかりそうな程顔を近付け乍ら、燃える飛行機から救い出してきた処でした。上からは別の天女が壺から水を注いでいました。

然し、六人の天女に、燃える「隼」から救い出された首うなだれた隊員の姿が、涙にかすんでくると春雄さんに見えて、あんなに優しくされ、見守られ、あの生命の水で、出撃する迄の心の苦しみも、傷ついた肉体の痛みもすっかり癒されている。

そしておだやかな美しい顔の天女が、舞うような姿で見つめ下ろす、又、両側からは、すぐにでも手伝えるように手を差し伸べたげにしています。

隊員の左手には手袋、右手にはつけていない。マフラーが風にゆらめき、左腕には目の丸がクッキリと。隊員の腕から流れる幾つもの赤い筋は、血なのだろうか、火傷なのだろうか、血と油とまじったものなのだろうか。4月から5月にかけての沖繩の特攻は、大した部分が撃墜されたと聞いていた私は、春雄さんの最後がどうだったのかを焼きついて離れ

ない思いでした。機上で頭でも射抜かりたのか、燃える隼と一緒に生きた儘で海に突込んでしまったのか、高射砲の弾丸で空中で粉な粉な一片の肉片も残さず散ってしまっただのか、などなど色々の姿が想像される悲惨な死に様を画き恐れ乍ら、我が身を削られる思いで長い年月を過して参りました。沖繩の海を訪ねた時は、あの海の中で、さぞ冷たくて冷たくて可愛そうにと囁いたものでした。

春雄さんの最後のことが、「心の重荷」、いや重荷だなんて表現しては申し訳ないことで

すが、人には見せられない字の乱れが、その儘、心の乱れのようにシカに私には伝わって来た彼からの最後の手紙。これから苦しんだものなどが、スーッと消え去って、寧ろ、春雄さんは苦しみ乍らも、信念を立派に貫き通してくれたという満足感を与えられました。六人の天女たちが、春雄さんも私も、共に天界に導いてくれたのです。

とにかく嬉しい。感謝しても感謝して、感謝し切れない。長い間の苦しみが瞬時にして昇華してしまつて、天女たちの美しい慈愛に溢れた眼に見守られ乍ら、安心して春雄さんへの朝晩の祈りが捧げられる。そして永遠に苦々しい春雄さんに見つめられ乍ら、私は一年又一年と、やがて再び出会う日迄、静かに生きてゆく力が湧いてまいりました。

仲矢先生有難うございました。シカと春雄さんの最後を見届けることが出来ました。心からお礼を申し上げます。

この荒木しげ子さんの礼状に対し、即ち返信を賜わり5月11日の命日の日に間に合、墓前に捧げることが出来ました由。先生の御芳志を有難くご紹介上げると共に、製作者の弁を併記することをお許し下さい。(編者註)

陶壁『知覧鎮魂』

に寄せて

仲矢 勝好(宮崎市)

当初、構想を迫られましたとき、この壁は当然、鎮魂の賦でなければならぬと考えました。

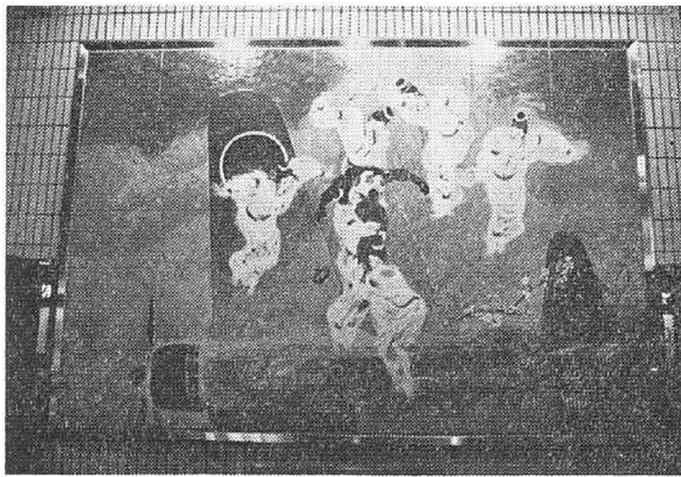
困難な点は、鎮魂という抽象性をいかに視覚化するかという処にありました。

題材は、大人から子供まで理解できる判りやすいもので、表現は内容の高いものでなければならぬ。(そこまで行きましたかどうかは後々の人々にご批判を俟つばかりでございますが)

少くとも三十年以上、或は百年の視覚に耐えるもの、場所柄性格からして、おのずからこんな条件が要求される。

構想の基本は亡骸を中央に置き、六人の飛天にその魂魄を救わせるというもので、ヒノマルをなるべく大きくこの位置に掲出したので隼の機体右半分を引き起した形になりました。

機体が燃える炎を、亡骸と飛天の光背になるように持つてゆき、飛天は観音菩薩の風俗



にして、六人は六観音の数にしました。

戦争の是非はここでは暫く措くとして、当時、はたち前後の若者たちが民族の楯となることを信じて殉じたその勁烈の心を、ありのままに、ここに留め記して後世に語り継がれる鎮魂の賦と致したい処です。

昭和六十一年十二月五日

知覧平和記念館

にて詠む

童笑顔と犬

仔犬抱き戦友と写る童顔^{かそ}拜し

目頭熱くかすみくるなり

天女に抱かれて

体当り御国の楯の神柱

天女に抱かれ花園へ昇天

鳥浜とめお母さん

お母さんと親われしお方の淡々と

語りし姿尊く気高し

合掌

この平和有難かりし若桜

散りにし御霊ぞ永久に賛えん

体当り

銃弾の雨に護国の精と化し

火玉となりて体当りせり

平和鎮護の神

紅顔の千二十六柱

護国の神と成りし益荒男

地震

体当りのビデオ見し時ゆらゆらと

大きくゆれし今知覧にて

開聞岳

今日も又飛び立ち行きし黒潮の

開聞岳を見納めにして

故郷へ房りて

来る時はホテルになりてお母さん

乙女恋しや知覧の里へ

昭和六十二年三月十八日知覧にて

万国戦没者の御霊に拜して

箱根路は五月雨れに濡れて緑々と

祖霊舎に額づき世界平和を

紅葉一葉

五月雨れや 緑の柔光^{ひかり}に

包まれて

苦むす上の紅葉^{もみぢ}摘みて

昭和六十二年五月十七日

箱根・祖霊舎にて

猪狩定男 詠

奇しき因縁

第八十一振武隊

石田 宗男

私は去る六月二十八日、東京市ヶ谷台の自衛隊内における全陸軍航空部隊々前祭並びに同副碑除幕式に出席のため、前日下関を立つて上京した。

式典当日、受付を終えて式場に向う途中、一人の婦人と一緒にになり、歩きながら話しかけると、その婦人は第八十一振武隊(特攻)隊員故岡山勝実軍曹の妹さんで、遺族として招かれた大阪市在住の岡山よし子さんとのことであった。

初めて聞く部隊名であったが、私が小月会のことを話したところ、岡山さんは非常に驚き「実は私の兄勝実は、特攻隊の第八十一振武隊々長片岡喜策中尉の部下として隊長以下

十二名とともに沖繩戦に向う途中、昭和二十年四月十六日から四日間、機体整備のため小月基地に立寄りました」と言われ、その後次第に次のようなことが明らかになったのである。まったく不思議な出会いというほかはない。岡山よし子さんも「兄の引合せとしか思えませんが」と感激された。

1、第八十一振武隊々員は熊谷飛行学校で訓練を受けたのち、二十年四月十三日、長野県上田基地の東部第五四〇部隊で出陣式を挙げた。

2、岡山軍曹は小月基地から父母宛に別掲の遺書と短歌を送っている。（下関憲兵隊経由？）

3、隊員たちは小月基地駐留期間中、NHK小倉放送局の取材を受け、翌月の五月十日夜（隊員はすでに四月二十二日前後に知覧を出撃して沖繩戦で全員敵艦船に突入戦死していた）「出陣前夜の決死の声」をラヂオ放送され、五月十二日には西日本新聞にもこのことが報道された。

4、当時の松岡小倉放送局長（いまから二十年ほど前に逝去）はその放送録音をレコード盤にして遺族に送ることを約束したと岡山軍曹の遺書に書かれてある。しかし、その後本土空襲が激しくなり、小倉も爆撃されたりしたためか、レコード盤はついて遺族には送られなかった。

5、さて話は変わるが、本年九月七日の朝日新聞下関版欄に「小月基地から出撃の特攻隊二人の辞世の書を遺族にお返ししたい」との見出しで、下関市員光の松田セツさん（八四）から朝日新聞下関支局に「太平洋戦争末期に、近くの王司温泉に宿泊してい

た特攻隊員を、同地区婦人会員一同が慰問した際、二人（隊長片岡中尉、副官大場健治准尉）から漢詩と短歌（別掲）の辞世の書を頂いたが、私の元気なうちに遺族にお返ししたいので捜してほしい。慰問した日、温泉近くの神社の境内で、八分咲きの桜を一枝隊長に差し上げたところ、隊長は桜の枝を片手に持ち、吟詠しながらひと舞いされました」と当時を回想し「宿舎には二十歳前後の隊員が十四、五人いたが、生きて帰れる望みもなく出撃していく若い隊員たちが気の毒で、何を話せばよいやらわかりませんでした」という記事の内容であった。

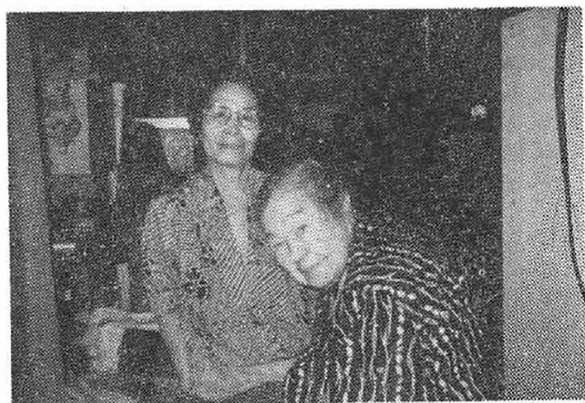
6、前項新聞報道の前日、小月会事務局（石田宅）に、朝日新聞下関支局から遺族について電話照会があった。幸いに事務局には前記岡山よし子さんから、前記西日本新聞記事のコピーを頂いており、記事には隊員十二名全員の遺族の住所氏名が載っていたので「古い記録だが調査して下さい」とすぐに回答できた。

7、その結果、十日後の九月十七日付朝日新聞記事に「辞世残した特攻隊長ら遺族わかる」として、片岡中尉の妻重子さん（六六）は群馬県明和村に、大場准尉の妻チヨ子さん（六五）は宮城県栗駒町に健在であることがわかり、遺族は非常に感激しており、漢詩と短歌は朝日新聞社を通じてそれぞれの遺族に送ることになったことが報道され、事務局にも通報があった。

8、なお、事務局は岡山よし子さんから前記レコード盤について調査してほしいと依頼されていたので、去る七月二十三日、福岡

市の西日本新聞社とNHK小倉放送局を訪問し、前記西日本新聞記事を示して、当時の新聞記者、放送局職員、レコード会社について尋ねたが、四十一年も経たことでもあり当時のことを知る人は誰もなく、レコード会社も今はなく、空襲を受けたりして解散したのではなからうかとの返答で、取り付く島もなく、残念ながら徒労に帰してしまった。

9、なお、⑥頁に記した去る六月二十八日の全陸軍航空部隊陣々前祭の式典で、多くの遺族を代表して「英霊に捧げることば」を述べられたお方は、奇しくも第八十一振武隊々長故片岡喜策中尉の妻片岡重子さんで傍らに付添っておられたのが故岡山軍曹の妹岡山よし子さんであったことが、うかつにも後日になってから気付いたことを深く恥じるばかりです。



知覧の特攻おばさん鳥浜とめさん（83）と岡山軍曹妹よし子さん（S61.5.3撮影）

岡山軍曹の遺書と和歌

「遺書」

元気で征まします。不幸の罪幾重にも御許し下さい。大事決行も後数時間。十九日録音を吹込みました。近日、小倉放送局よりラジオ放送されます。また家に、軍からか、局よりレコードを送ってくれるはずで。勝負は笑って行きます。何時までも御元気で。祖母様達にも宜しく。

御多幸を御祈り致します。

特別特攻隊 振武隊々員

岡山 勝実

父母上様

「辞世」

今ぞ征く 君に捧げんこの命

身は南海の玉と砕けん

たそがれの 洋上はるか雲遠く

我は果さん特攻の任

君のため はばたきの音勇ましく

我が特攻の花と散る

敷島の 男の子は今日ぞとぶ

心にかかる雲もなし

石腸特攻隊

林中子郎遺族 安村 朝子

日本全土殆どとていい程焼土と化し打ちのめされた祖国に終戦の詔勅が下り終戦を迎えて四十年余、今年三月特攻隊員慰霊祭に招かれ突然のことにびっくりしました。弟は終戦直前の七月三日新聞報道により陸軍特別攻撃隊石腸隊員として一月五日比島沖にて戦死感状上聞にたっし二階級特進の栄に輝けり。

とのほうどうのみ、陸軍のほうからはなにの
通達もなく過ぎました。

昭和二十一年四月、昭和二十年一月五日比
島沖にて戦死との公報とともに白布に包まれ
たちいさな白木の箱となり帰郷いたしました。

四十年をへて思いがけず慰霊祭に招かれ桜
花爛漫日本晴れの四月、月こそ違へ命日五日
靖国の御社の御前に御霊安かれと掌を合せま
した。

昇殿参拝の後直会の席にて竹田宮殿下の御
慈愛に満ちた御言葉をいただき観音寺御住職
の御英霊に献杯と申されました時思わず涙が
あふれて何も見えませんでした。皆様の御労
力によるものと心より感謝したことでした。

これよりさき昨年十二月八日大塚様より弟
の遺書と血書の日章旗を御送りいただき空襲
にあいながら四十余年お持ちいただいたこと
にお礼の言葉もありませんでした。

比島より大塚様宛の遺書には敵機空襲によ
り愛機を焼かれ飛ぶことの出来ぬ苛立ちに先
行された軍神を思う気持ちがひとしと感じられ
ました。やがて一月五日時を得て祖国に残し
た肉親の安全を願う特攻機の操縦棒を握り敵
艦船に突入目的を遂げました。

又父母妻子を祖国に残しお国の為と従軍戦死
された方々があつたればこそ今日の日本の繁
栄があると思ひ二十歳のうら若き命をお国に
捧げた弟を思い草深い紀州に住みながらも往
復新幹線の車窓より白雪をいただき千古変ら
ぬ富士を眺め孫子の代まで平和であれと祈念
せずにはおられません。またの日靖国の
御社に参詣出来る日のあらん事を念じつつ
家路につきました。

二伸 特攻隊への投書を書きながら提出
をためらっておりました私は拾五日テレビで
今は亡き海軍特攻隊員鶴田浩二氏がかつての
特攻基地国分の飛行場跡で特攻とは……とし
て同期の桜を歌はれました時載せて頂くのは
二の次読んで頂くだけでもと思ひ提出いたし
ました。次に大塚様宛の遺書お書き致しま
す。

前略
七軍神既にゆきて護国の英魂と化す。何れ
も一機一艦船を葬りて。
時恰も友軍背後に迂回行動中の船団を捕捉
その過半を沈む。その友軍の危機を救い作戦
に寄与する極めて大、軍司令官閣下又大いに
喜ばれ有り。先駆者七神の偉功を忍ぶと共に
誓って吾人等も後に続く大戦果を挙げん。空
襲により愛機を失いしより状況不利前線へ推
進するも整備の關係により日に二機宛後に残
れるは概ね調子不良なる奴ばかり逸る心を静
めつつ敵艦に撃突するものなれど戦果を最大
ならしむべく途中にて不覚をとらざる如くだ
だ黙々として整備に任じあり。

前略

目下残留しある細田中尉殿、上野、岡上、
鈴木、杉町、持田、それに林、の七名井樋、
伊藤、は七日に前進。吉武、安達、は隊長と
共に二日に前進せるも飛行機の都合にて残留
しある由。かくて過半の者本意ならずも銚子
出発以来一閱月再び奉戴日を此処比島の戦野
に迎ふ。遙か急を告ぐる風雲を望みつつ咬竜
雲を得ず後方に永らふ。隊長殿始め七神既に
神あかれます時、不覚の涙なきにあらず身の
腑甲斐なきに嘆き吾誠の足らずして武運拙き
を恨むのみ。二度ならずもその機を失ひて一

度は隊長機と共に第二編隊長機として前進せ
んとし出発直前車輪パンク翌日追求せんと伊
藤と共に多数の人々に送られて離陸せしも三
十分にして発動機不調引き返すの止らなきに
いたる。 中略

戦局未だ樂觀を許さず吾人に期待さるる極
めて大なるに、飛ぶべき翼なきを如何せん。
されど来る暁、必ずや天晴の戦果目に物見
せてくれんと存じております。 中略

未だ浮き世の塵に染まず汚れなき身潔よく
殉皇の至誠に燃えてバット散らん身誇らかに
思ふ若き赤き血潮にて認めたる日の丸、骨だ
に還らぬ身には格好の遺品とて、至誠必ず天
に通ずるを確信し小指を斬りて古武士に倣い
血書せるを御送り致します。ほとばしるまま
思はず一面に散らして申し訳なく存じて居り
ますが。

同じ血もて敵艦に轟炸ふりそそぎて速へる
米鬼を皇化の潤ひに覚醒せしめんと存じて居
ります。

右のものの既に家卿に遺品とせる裡に入れあ
る故何れ家より御送りするものとぞんじま
す。 先は右御報告迄。

少候22期

国華隊長

渋谷大尉の遺書

八牧 通泰

四十二年前の今頃、昭和二十年六月十一日
夕刻、梅雨模様で暗雲が低くたれこめるなか
を終焉近い沖繩軍支援のため、九州万世基地
から進発する十二機編成の特攻隊があつた。
正式隊名は第六十四振武隊、国華隊とよばれ

た。この隊は四月に原町で編成され、元柳
屋旅館が宿舎であつた。旅館の子息で私も親
しい松浦尚三商工会議所専務理事は当時小学
校四年、身重な若い妻とのひそやかな別れ、
関西から不便な汽車を乗り継いでかけつけた
恋人とも思える女学生が隊員にすがって泣い
ていた姿、若い少年飛行兵が歌っていた故郷
の唄など、幼な心に焼きついた短かい出逢い
と別離、そして戦争の悲しき、空しき、その
やりきれない想が戦後長じて平和、学生運動
や自分自身の生き方への原点になったと私に
語る。

国華隊長渋谷健一大尉は山形県出身、下士
官から累進した努力家、温厚で慈愛深いベテ
ランパイロットとして上下の信望を集めてい
た。若い夫人は第二子を宿している臨月の身
であつた。その別れ、そして突入時のご夫妻
の心情は到底私たちに推し測ることができな
いものがある。奇しくも渋谷大尉突入散華の
実にその日、生まれ代りのように男の子が誕
生したことは壮厳なドラマともいえる。

戦後三十年、原町の慰霊祭に母子で仲良く
ご出席されたが、夫人は無口で控えめな方
で、隊長と同期だった戦友が手を握り男泣き
に泣いていた感動の姿は今も忘れられない。

また忘れ形身のご子息も亡き父上の期待にた
がわぬ凛々しい好青年だった。隊長が出撃前
長女倫子さんと未だ見ぬ生まれくる愛児への
遺書は幼な子を残し逝く父親の世紀の遺書と
語りつぐべきであらう。紙数に限りがあり全
文を述べ得ないが追悼の思をこめ謹記する
遺書「父より倫子並生れ来る愛児へ
真に今は皇国危急なり、国の運命は只一つ
航空の勝敗に決す。一略一父は運まれて攻撃

を恨むのみ。二度ならずもその機を失ひて一

と号第三五飛行隊

稲葉 由郎

隊長と成り隊員十一名年齢僅か二十歳に足らぬ若桜と共に決戦の先駆と成る一略一尚且戦局の勝敗は神のみ知り給ふ、真に国難と謂ふ可なり、父は死にても死するにあらず悠久の大義に生くるなり。

一、寂しがりやの子に成るべからず、母あるに在らずや、父も又幼少に父母病に亡したれど決して明さを失なわず成長したり、まして戦に出て壮烈に死すと聞かば日本の子は喜ぶべきものなり、父恋しと思はば空を視よ大空に浮かぶ白雲に乗りて父は常に微笑みて迎ふ。

二、素直に育て 戦勝ても国難は去るにあらず、世界に平和のおとづれて万民太平の幸を受ける迄懸命の勉強をする事が大切なり、二人仲良く母と共に父の祖先を祭りて明るく暮すは父に対しての最大の孝養なり。父は飛行将校として栄の任務を心から喜び神州に真の春を招来する神風たらんとす。皇恩の有難さを常に感謝し世は変る共忠孝の心は片時も忘るべからず。

三、御身等の母は真に良き母にして父在世中は飛行将校の妻は数多くあれ共母程日本婦人として覚悟ある者少し。父は常に感謝しありたり、戦時多忙の身にして真に母を幸福に在らしめる機会少く、父の心残りの一つなり、御身等成長せし時には父の分迄母に孝養せらるべし、之父の頼みなり。現時敵機爆撃の為大都市等にて家は焼かれ父母を亡ひし少年少女数限りなし、御身等は母、祖父母に抱かれて真に幸福に育ちたるを忘るべからず。

書き置く事は多けれど大きくなった時に良く母に聞き 母の苦勞を知り決して我儘せぬ様望む。

遠藤秀山少尉に会ったのは昭和二十年二月だ

のある日の夕方であった。私は予科士官学校の生徒で、食糧事情の良くない学校に居るよりも、地方のはうがのんびり出来るだろうという軍医の親心で、しばらく自宅療養を命ぜられて水戸に帰郷していたときである。

外出しての帰途、自宅への角を曲がったら出会いがしらに、少尉殿に手招きされた。

「候補生いまごろなんじゃ」

「候補生いままごろなんじゃ」と言われたように思う。てっきり叱られると思つて駆け寄り姿勢を正すと、五八期の遠藤だと名乗られて、叱られるどころか

「うまいものを食わしてやるから付いてこい」

ということ、鳥見町の野球庵に連れていかれた。その間に私が今頃この町をうろついている事情を説明したことは言うまでもない。そしてまだ候補生ではないことを弁明したのだが、判っておられたのだらうに最後まで候補生とよばれたように覚えていた。

店には五七期の少尉殿が何人かおられて、生徒は飲めないのです、と事情は先刻ご承知の先輩に申し上げるのに、委細かまわずみんなで飲め、食えと飲待された。小用に立ったときに一緒にいられた五七期の方から

「おい、貴様、縁者か、遠藤はなあ、特攻隊だぞ」と教えられた。

遠藤少尉の店での様子には、何もそれらしきを感じなかったが、店に行くまでの人なつ

こい、そしてしんみりと話を聞きながらの歩きぶりは、ああ、やはりと思わせるものがあった。

「明日前渡に來い、おれは特攻で征くのさ。」

というその日のわかれの言葉に、翌日常陸飛行師団をたずねた。

営門前の寮に案内され、座学があるからというので隣の部屋のこたつで待っていると、教官の声が聞こえてくる。それは南方への航法の注意であつたらしく、沖縄の飛行場には障害物が置いてあるなどの話が漏れてきて、移動だけでも大変なことなのだと思つた。その教官は私が戦後航空自衛隊に入つて世話になった、真崎康郎大尉(士五四)であつた。

遠藤少尉の部下の人達に紹介されて、部隊の中を案内してもらい、夏の飛行服を受領に行くのだと付いていったが、そのセクションの長の人我真新しいふんどしをこれで申し訳ないが銭別だと渡してたのにはさすがしんみりさせられた。

帰路、浅井少尉(特操一)が歯医者に行くと同行してくれた。

「歯医者に行くのは石田三成が柿を食べなかつた心境ですよ」

「遠藤少尉のお父さんは閣下なのだそうです。とても好い隊長です。みんな気持ちひとつです。きつと立派に任務を遂行します」と話されたのを、まことに複雑な気持ちで聞いたものである。

一カ月たつて、私は本当の士官候補生になり、豊岡の航空士官学校に入校した。靴箱に

名札を貼ろうとすこし厚くなっていた古い名札を剥がしたら、下から「二ノ二 遠藤秀山」という名札が出て来て、その因縁に驚いた。(士六〇期 水戸市出身)

九段の思い出

二瓶 英二郎

靖國神社で知られる九段は、江戸時代にこの傾斜地に九層の石段を築き、幕府の御用屋敷を建てて、これを九段屋敷と称したことから地名が生まれた。

明治維新後、石段を除去して坂道を造り、交通の便を図つたが、急勾配で危険なため、大震災後の復興計画により大改修され、現在のようになった。

この坂上にある靖國神社は、明治二年(一八六九)国事にたおれた人々を祀り招魂社と称したが、明治十二年(一八七九)靖國神社と改称した。

九段坂

新選東京名所図会の九段坂は、富士見町の通りより、飯田町に下る長阪をいふ。むかし御用屋敷の長屋九段に立し故、之を九段屋といひしより此坂をいひしなり。

今は斜めに平らかなる坂となれるも、もとは石を以て横に階をなすこと九層にして。且つ急峻なりし故に。車馬は通すことなかりし。江戸名所図会載る所の図を見て之を知るべし。然るに狂歌江戸名所図会に、車ひきのぼるにあせの玉川や足も千鳥にする九たん阪。又九段阪たやすくのぼる荷車の高くも積

て引く牛か淵なとあるは誤なり。古今は、合力夫ありて之に命すれば車の後推をなす。僅

かに一銭を投すれば足れり、とある。

偕行坂

又、偕行社については、飯田町二丁目五十番地、即ち九段坂の北角。田安門の前通りに在り。渋川助左衛門の宅址にして。前に鉄製の門も構へたる煉瓦作りの大館なり。此偕行社は。海軍軍人の水交社と同じく、倶楽部に類せるものにして、凡そ歓迎、送別及び戦争の記念日等、陸軍々人の集に係る事は、必ず此の館に於て開くを例とす。将校には偕行社々員となりて。毎月会費を納むべきの規定ありて、毎月偕行社記事と称し、苟も戦術に関する研究の事実論評を掲載せる雑誌を発行頒布す。その印刷所は同益社にて中阪に在り、(註、中阪は九段坂の北方にあり、もと飯田坂といへり、飯田喜兵衛の居住せし地なるに因れり。中阪と称するは、冬青坂と九段坂と中間に在るを以てなり。)

按るに、偕行という文字は、詩に修「我甲兵」予子偕行。易に風益之道予時偕行とあるより出たるならむ。以て本社旨趣の存する所を知るべし。と記されている。

九段坂上

この坂上は江戸時代、観月の名所として名高く、毎年一月と七月の二十六日を夜待ちと称し、人々が坂上で月の出を持つ風習があり、広重もそれを「江戸名所四十八景」の中に描いている。この坂はまた険しく長い坂として知られ、北斎の名画「九段牛ヶ淵」は切り立つ断崖がその難険さをしのぼせる。

九段坂が現在のようにゆるやかになったのは大正地震以後の改正工事以来で、以後坂の中央も電車が通ることになった、電車が靖國神社前で混雑してくると、本箱をもった人

が、「英霊」ですといつてうやうやしくささげてもって人ごみをかきわけると、一斎に道を拡げて通すと、降りてから成程、こんでいるなど、うそぶいてそそくさと、姿を消す不心得ものもあった。

九段上と市ヶ谷駅前間に九段小学校同期の網野という馬具屋があった、その家から作家、網野菊女史が出た。随想「ゆれる章」で震災前の九段坂を「今の九段坂は随分広い街幅になって居るが、昔でも、他の坂に比べると相当幅が広がった。商業の振はぬ静かな街で、九段上と市ヶ谷駅前間の間を、たった二台の電車が折返し運転をしていた。九段坂はまだ昔の絵図に残っている峻しい急な坂で、坂をのぼる車のおしするのための「立ちん坊」といふ職業の男が坂下に立って居たりした。」と書かれている。

こんどの大戦で、九段から神田一帯は焼野原となった。その模様は内田百閒「東京焼」の昭和二十年四月二十二日の頃に、「空の昭和二十年四月二十二日の頃に、「空の火の手、すぐ近くの九段の火事は家の前の従来から一走りの二七通りまで迫り、或はこの辺りもその続きで焼けるかと思った。又新見附の辺りからも焼けて来ていると云う事であった。表の焼け出された人々が列になつて通った。火の手で空が明るいから、顔まではっきり見える。みんな平気な様子で話しながら歩いて行った。」と誌るされている。戦火はひろがって牛ヶ淵をまたいで、近衛連隊をも焼きつくし、その焼跡には一般市民に開放されて現在の北の丸公園がつくられた。

九段坂魂祭るころ時鳥

子規

忠臣蔵と陸賢大僧正

陸士54期 梅田 康之

一七〇二年、赤穂浪士反乱事件は忠臣蔵として二八四年間演じ語り継がれてきた。江戸の町人は素晴しく総べてを承知で忠臣蔵を楽しんできたが、現代人は詮索好きで科学的に解明しようとし将に百家争鳴の感。だがここに史家、学者共が何と言おうと真実を伝える資料がある。泉岳寺境内の場面である。当日偶々宿泊中の二僧が書き残した貴重な史料が如実に物語っている。一人は土佐東福寺の月海和尚、他は秋田永鷲寺の住職で共に多感の十八歳、大石以下四十六士を目の当りにみて強烈な印象を受け急ぎ記した目撃談こそ最も信憑性に足るものと謂えるだろう。忠臣蔵は観る人読む人十人十色で感激する場、心を動かされる行は各々異なるだろうが、私はどういふわけか泉岳寺境内の情景が心に焼け付いて離れなかった。なかでも昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発の日発売された吉川英治の忠臣蔵の泉岳寺炉辺談の『白き世界』は珠玉の一編である。左に一文を借用すれば

白き世界 (原文ノママ)

泉岳寺の常法堂には、その朝、僧寮のものがみな集っていた。禪式の礼茶を喫み合つて、雑談してゐたのである。

「なんぢやらう、騒がしいが?.....」
「たいへんです。」
「誰か云つて、耳をそばだてたところへ、番僧が、

と、駆け込んで来て、事態を早口に告げたの

である。

取次僧たちが、奥へ駆けこんで来たために、本堂にはもう誰もいなかった。門内に入つて来た四十六名の代表者が、そこに立つて、大きな声でものを云つてゐるのが、常法堂の伽藍までよく響いて来た。

「寺中へまで——申し込れる。われわれは故浅野内匠頭の家来共に候が、今晚、本所の吉良殿へ推参、上野介殿の御しるしを乞ひうけて、本意を達し、故殿の御墓前にそなえんものと、一同、当菩提所まで引き揚げて参りました。しばし、墓前へ通つて、君霊に御奉告仕ります間、余人共の立ち入らぬやう、山門をお閉めおき下されたい。」

常法堂の僧たちは、いつの間にかいんとして、その声音に耳を奪はれてゐた。

(どうしよう?)

と云ふ顔いろが、まづ住職の長恩和尚の眉や眼に動いていた。

その気持を察して、誰かが、
「番僧、断れ、通してはならんぞ。——公儀のおゆるしを待たずには。」

と、云ひ放つた者があった。

「承天則地が、途端に、ぬつと立った。則地は、長恩和尚につぐ当山の副司だった。

「待て、さう素気なく、追ひ返してよろしいものかなう。公儀の御法によつて処置あるは、当然、上役人方のなさる事、いづれおさしつもあるう。——ぢやが仏者には仏者の致し方——考へ方といふものがなうてはならぬ。当泉岳寺はいふ迄もなく浅野家代々の菩提所、かかる時こそ、有縁の廟とならねばなりません。いはんや、その忠誠なる家来共が此寺の一樹を頼つて、亡君の墓前に衷心

の手向けをいたそうとするのに、何を以て、僧侶の立場からそれを拒む理由があらうぞ。……通してあげたがよろしい。通しなされ。早速、墓所へ通るやうに申しなされ。」

すると、中庭へ廻ってゐた門番が外から云った。

「いえ、則地様、もうみんな、そろそろと、墓所のはうへ通ってしまひましただ。

則地は満足さうに、

「そうか、それでいい。——門番、見物人たちが境内から出てもらって、暫時、山門をかく閉めておきなさい。」と、云ひつけた。

僧たちが出てみると想像以上の群衆だった。深川、京橋あたりからまで尾いて来ている数なのである。追いついて門を閉めると、塀にたかたり、墓地の垣を破ったりする。泉岳寺の衆僧は、群衆の持つて来たその大きな霧風氣に忽ちつまれてしまつて、いつのまにか、自分達まで劇中の人間のやうに昂奮して、寺内を駆けずり廻っていた。

——然し、おくつきの雪はまだこんもりと淨らかなまま積っていた。たくさんな石碑がみな丸い雪の塔になつてゐて、今朝は、墓地の持つ陰気な影といふものが何処にもない以下略

国破れて九年目、昭和二十八年世田谷山観音寺に於て第一回特攻慰霊祭法要が営なまれた。別院で菅原將軍より特攻観音の由来を承るや、二八四年昔の白蟻々の泉岳寺が脳裏をよぎった。そして幕府（將軍綱吉）の行手に巨像の如く立ちのたかかった承天則地と駐留軍（リッジウェイ司令官）の前に法灯をかざした陸軍大僧正が重なり合ふのをみた。正に則地の化身にあらずや。元禄の則地大和尚と昭和

和の陸軍大僧正。共に城南の一角より大慈大悲をたれたもう。

丸田理事長を偲んで

副理事長 鈴木 瞭五郎

頭健そのもののようにみられた丸田理事長は昨年まで特攻隊慰霊顕彰事業に没頭され、その中核的役割を果たしてこられた。しかし、今年に入つて二月初旬突然家庭において吐血されて横浜国立病院に入院、重症の胃がんを診断を受け、手術後約一カ月退院して自宅に移されたものの、病状は快方に向わず、がんは肝臓に転移して悪化し、再び神奈川がんセンターに入院されたが、遂に七月二十二日午後二時四十分逝去された。この間御発病のことは御本人の意志により、ごく限られた人を除き内密にされたが、この点について不行届や非礼があったとすれば、ここに事情を述べて深く御詫びしたい。丸田さんは七十六歳の御生涯の中でかつて入院されたことがなく、今回が最初にして最後のものではあったといふ。御本人からの御話によれば、丸田さんが還暦を迎えられたとき、御自身の生涯は七十歳までで十分として、御孫さん達とその生死について掛けをされ、七十歳まで生きたら自分の負けとされたが、見事完敗したと笑つておられた。しかしそれから六年後の今はそれが現実となつて洵に情別の情に堪え難い。丸田理事長は格別に御孫さん達の育成に心血をそがれてこられたが、それぞれの御孫さんの立派な成長と進歩を見届けられ、その満足と安心の中で大往生を遂げられたことは偉人にふさわしい御最期といえよう。丸田家の本年は御本人にとっては喜寿であり、御夫妻にとつては金婚式の年であつたと承るが、年初御発病のため、これらの御慶事が後回しとなつて遂に実現を見ずに終つたことは洵に残念至極と御同情に堪えないところである。

丸田理事長の御尊父は海軍軍医官（大佐）であつた関係で、その幼、少年時代は海軍の基地を転々とされ、広島陸幼から陸士（四十期）と進んで尉官時代は生粋の戦闘機パイロットとして加藤軍艦隊の第一中隊長として武名を挙げ、ノモンハン航空戦では殊勲を立てる等の大活躍をされた。佐官時代には陸大を卒業、中央の要職に投じ大本営陸軍参謀を勤められたが、このとき陸軍の特攻作戦には終始反対されたという。

戦後の丸田さんは昭和二十七年警察予備隊に投じられ、昭和二十九年には航空自衛隊に移り、米国に留学してジェット戦闘機操縦を修習して再びパイロットに復帰し、昭和四十四年一月退官までに第三航空団司令、西部航空方面隊司令官、術科教育本部長、航空自衛隊幹部学校校長、航空総隊司令官と要職を歴任されておられ、これらの功績によって数少ない勲二等の受勲者となられた。洵に軍人として心残りのない充実した輝かしい御生涯といえる。

私（海兵六十八期、陸士五十三期相当）が丸田さんの知遇を得たのは昭和二十七年、現在の浜松南基地に保安隊航空学校を創設することになったときである。当時の丸田さんは総務部長であり、私は教育部飛行教官であつた。そしてその後も長期間にわたつて自衛隊航空の建設強化で苦勞を共にさせて頂き、特に丸田さんが昭和三十八年七月西部航空方面隊司令官になられたとき、その防衛部長を勤め、二年間にわたつて西部航空方面隊の全面的近代化事業に取り組んだときの思い出は深い。

第五航空団（宮崎県新田原基地）への新鋭F-104戦闘機の導入、第八航空団（福岡県築城基地）の新設（F-104F）、山口県岩国基地への第八十一航空隊（F-104F）の移駐（米海軍と共用）、ナイキSAM部隊である第二高射群の建設配備（芦屋・高良台・築城）、西部航空警戒管制団のバジ化（電計化）、飛行部隊のための板付航空基地と美保航空基地の利用等の防衛力整備事業は同時的であり、多角的であつた。これらの諸計画が整々かつ順調に推進処理できたのは一にかつて名將丸田司令官の綿密にして細心周到、卓越した判断と判断による指揮指導力に負う所多大であつた。よつて当時の主要スタッフは以後春日会（司令官部所在地春日市からその名をとる）を結成して丸田さんを囲む会とし、逐年当時の思い出を楽しんできた。

私が特攻隊の慰霊顕彰事業に参加するようになったのは昭和五十二年の春であつた。当時退官直後の私は佐藤副会長から海軍側の世話となるよう要請を受け、世田谷特攻平和観音の奉賛事業に協力することとなつた。間もなく秋山、高橋、佐藤、寺崎、丸田、最上、斎藤各氏の主要スタッフの顔が揃い、昭和五十四年に元竹田宮を会長に奉戴して本会は発足し、事業の推進に取り組んできた。本年四月五日には第九回の特攻隊合同慰霊祭を、靖國神社において挙行し、昨年七月再興された遊就館内に特攻隊顕彰施設を整備奉納し、館内において特攻隊写真展を開催して第一期事業を概成することができた。この間陸海軍合同の調整、個々の特攻隊慰霊顕彰団体に対する協力参加要請、会の設立運営、事業計画の策定と推進、事業基金の募集、特攻観音大法要と靖國神社合同特攻隊慰霊祭の年度実施等々に伴う複雑困難な問題を粘り強く解決処理して今日の安定充実した態勢を整えることができたに至つた。この喜びを最も強く噛みしめておられたのは丸田理事長その人であつたであらう。過去十年間丸田さんは常にその渦中に身を置いて打開推進の中核の任を果してこられたのである。四月五日の靖國宮に丸田理事長の姿がなかったことは、集つた私どもの大きな喜びの中に言ひしれぬ淋しさを黒点として残した。

しかし、自分の軍人としての人生を輝しく終えた名將丸田さんは最後の生涯の十年間を自分が拮据できなかった特攻戦略の殉国戦士の慰霊顕彰に心血を傾注し、遂に死をもつてこれを完結された。大満足の丸田さんは今や天国にあって特攻諸英霊とともに楽しく煙草を嚥らせ、美酒を飲み交しておられよう。心から丸田理事長の御冥福を祈つてその御偉徳を讃えてやまない。

合 掌